
捨てね娘

凧澤 唯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捨てね娘

【Nコード】

N8842Y

【作者名】

風澤 唯人

【あらすじ】

平凡な高校生活

なにも変わらない生活のなかを生きる男子生徒、笹倉真琴

そんな真琴の幼なじみの性格最悪、自分に逆らえる男子はいないと

言う女王様、来栖深雪

謎の女の子、猫苗柚子

そんな三人がひょんなことから出会い、ひょんなことからゆるーい

共同生活を始める。

そんなラブコメディ。

*

作者、素人のために文才に疎い部分があります……
それでも大丈夫な方、お読みください…

ぶろろーぐ

風が冷たい

最近は暖冬だと言っけれど、甚だ疑問である。

首に巻いたマフラーの隙間から伸びる、携帯音楽プレイヤーのコードを指でいじくり回しながらの帰路。

普段は学校がある時間帯なのだが、今日は県民の日ということで休みなのだ。

ずっと家でごろごろしていると、仕事で夜まで帰って来ない親のせいで昼飯をコンビニに買いに行った帰り。

商店街と自分の住む地区を繋ぐ長めの橋をだらだと歩いていると、行きには反対側を歩いたから気づかなかった段ボールがポツリ。

中からは可愛らしくにゃーにゃーと鳴く声がする。

先ほど買って来た買い物袋のなかから半額で安売りされていた、魚肉ソーセージを出して段ボールに近づく。

案の定中には子猫が一匹。俺が覗き込むと明らかに敵意剥き出しで、箱の隅で毛布にくるまっている。

「なんだよ、怖がることないだろ」

自分は昔から動物には好かれならしい。散歩中の犬には吠えられ、飼っていたハムスターには必ず指を噛まれ、仕舞いには動物園の動物達から威嚇される。

悪いことをした記憶はないのに、だ。

「……はぁ……ほらよ」

いつまでたつても近寄つて来ない猫を見ていると段々と悲しくなってきたので、ソーセージを段ボールに放り込むと立ち上がる。

猫はいまだに警戒しているが、ソーセージを見るとこちらをジッと見ながらちょいちょいと手を伸ばしている。俺はそんな猫を見ながら少し和み、再び橋を渡りきろうと歩き始めた。

しばらく歩いているともう少し先に段ボールがもう一個。しかし何故か違和感が拭えない。

誰がどうみても明らかな違和感。俺は一応、あくまでも一応先ほどと同じように魚肉ソーセージを取り出して近づいて行く。

「……………」

段ボールの中の生き物はこちらを見ると直ぐ様ソーセージに気付
き、明らかに期待した目をキラキラとさせながらこちらを見ている。

俺だって鬼ではない、先ほどより好意的な生き物に少しだけ嬉し
そうに頬が弛んだかもしれない顔を擦りながらイヤホンを外し、ソ
ーセージをその生き物の口元にちか寄せる。

すると、驚いたことにその生き物はソーセージを手で掴み、器用
に食べ始めたのだ。しかもそれだけではない。

「……………美味しいっ」

喋ったのである。

ここでその生き物を見ながら考えた。インコだって喋る。猿だっ
て手で掴み食べる。あり得ないことではないのだ。もちろん、人間

はこれらを両立しているが、寒空の中段ボールに入って震えることはない。……とは一概には言えないが、大体はそうなので人間のせんはない。

ではなにか。

わからないので立ち去ることにした。

「…ま、待ってくださいっ!」

今、なにか聴こえた気がするが気のせいだ。イヤホンを再び耳にはめれば幻聴は止み、家についたら全部わすれる。

「あう……」

イヤホンをつけてからだ、何故か目の前を先ほどの生き物がぴよんぴよこと跳ね回っている。まるでなにかを伝えようとしているよ

うだが、幻覚なのでスルー。

寒さが肌に刺さるようだという表現があるが、それと酷似したものだと考えることにした。寒さが網膜と鼓膜を刺激し、あらん幻想を見せている、ということだ。

「むうう…とりやつ」

イヤホンがその生き物によつて無理やり引き取られた、がそれはきつと風が吹いたのだらう。多分イヤホンの部分だけを鎌鼬的なにかが吹き抜けたのだ。

「えへへ、無視するから取っちゃいましたっ」

やばい、死ぬのかもしれない。

幻想が度を過ぎている。

あれか？今日が休みだからといって、昨晩夜更かしをしてゲームをやつてたからか？

それなら納得が……できる訳がない。

「…あーゆーモンキー？」

とりあえず全国で使われている英語を自分なりに駆使してコンタクトしてみた。余談だが英語は進級はできる、といあぎりぎりである。そもそも英語って役に立つのか？

……閑話休題

「も、モンキー！？えと、あの、のーモンキー」

こちらの言葉は理解できらしく、なにやらぶんぶんと顔を振りながらそう言つとジリジリとこちらに詰め寄って来やがる。宇宙人？UMA？とりあえず、怖い。

「えと、ごめんなさいっ！！」

こちらとしてみればそちらが嫌な訳で、いつ捕食されるかもわからないので顔を逸らしながらとりあえず謝ると、全力でその場から走った。

「っ！ ど、どこ行くんですか！」

急に走られると不意をつかれたらしく一気に差は広まる。後ろチラリとを振り返るとなにやら大きなキャスターバッグを派手に転がしながらこちらを追いかけて来てやがる。

しかし、俺をなめてもらつては困る。伊達に怠け者の真琴とは呼ばれてはいないのだよっ！

しばらく独走状態をキープをしていた筈なのだが、

「とりやつー！！」

……気づいたら後ろからかなり勢いよく体当たりをくらい、買い物袋に入っていた卵を絶対に割られないようにと自分を犠牲にして守りながら派手にこけていた。

自分を犠牲した成果として、卵は守れたのだが尋常じゃないくらい頬が痛い。顔の横をぎりぎりでガードレールがあり、どうやらそれにかすっただけらしい。血で濡れているのがよく分かる。

「ふふふ、逃がしませんっ」

「いや、ふざけんな」

うつ伏せに倒れる俺の上に馬乗りになりながら笑ってやがる。腰の辺りに乗りながらぐわんぐわんと揺れながらこちらの背中を手をおいて「こうみえても音速の……いや、光速の……ゆずゆずとは呼ばれてないのですっ」と明らかに今作ったようなことを言いながらこちらの顔を覗きこんでくる。

「……おり」

「猿だとか、人を見た目で判断しちゃ……血がでてますっ！」

全くこちらの話を聞く様子はない。ただ一人で慌てながら茶色い髪の毛をぱたぱたと揺らしながら焦っている。つか、お前のせいだ、間違いない。

というか恥ずかしい。人目とかそういう問題ではなく単純にこんな格好と言つのがである。そう思いながら身体をよじらせていると上でがっしりと態勢を保ちながらなんかぶつぶつ言っている憎き生き物の顔が近づいてきた。

「えと、えと、応急措置しなきゃっ!」

その後、頬にざらりとした感触。

応急措置という項目で傷口を

ペロリと舐められた。

どうやら動物に嫌われ、『捨て猫』に嫌われるらしいが、『捨てね娘』には好かれる体質らしい。

ぶろろーぐ（後書き）

ふー、疲れたー

素人だけど頑張ってきた気がする。

お読みいただきありがとうございます♪

よかったら次回も温かい目で見守ってください…

1話 日常の側には非日常

頬を舌がはい回っておりその違和感に腕じゅうに鳥肌がたつた、
と思えばその直後に傷口を刺激する痛みにも身体を跳ねさせる。

そんな俺の身体を押さえつけながら未確認生物はこちらの表情などお構い無しに、傷口をまるで赤ちゃんみたいに吸い付いてきやがる。

「いつてーっよー!!」

流石になにをされたのかがきちんと把握できてきて、つい勢いよくそいつの顔をがしりと掴むと引き離れた。その際に垂れ下がった髪の毛までもが傷口に触れて痛みを再発させる。

「…血、なくなりましたっ!」

何故かはわからないがこちらが怒っているというのにそいつは満足そうに小さくガッツポーズをとりながらにこにことしている。

ああ、可愛いななどと思える訳もなくふつつつと燃える怒りを抑えながらそいつの肩を押して、ずるずるとほふく前進のようにしながら脱出を試みる。もちろん卵は脇において安全を確認してからの行動である。

「…あははっ、面白いつ」

「ぶっ飛ばしてやろうか?」

「……………ぶっ飛ばす?」

そいつの下から脱出に成功すると明らかにそんな俺を見て楽しんでいたらしく、手をぱちぱちと叩きながら呑気なことをほざきやる。しかも脅しても動揺するわけでもなく、可愛らしく小首を傾げ始めた。

どうしたらこいつに一泡吹かせてやれるのだろうか。じろじろと顔を見ながら考えるがそんな俺を見ながらにこにことしている大きな目。走ったり、突撃などをしたからか多少ボサボサになった茶色く染まったロングのストレートの髪の毛。寒いなか走ったために少々赤くなった童顔フェイス。

「……………」

まったく非の打ち所がないんですけど。どうしよう、じろじろ見たせいなのか照れ始めたそいつを見ているとこっちまで恥ずかしくなってきた。きやがった。

「…帰る」

「はいっ!」

「いや、着いてくんなよ?」

「…………?」

買い物袋を手にとって歩き始めた訳なのだが、当たり前というようにバックを手を持ちながらついて来てやがるし。注意をすれば自

分のことだとは思っていないらしく後ろを振り返りながら「誰もいませんよ？はっ！？幽霊！？」無駄に可愛らしくおどけてやがる。

ちなみに靈感は自分にはないと自負している。あつたつて得するわけでもなければ、コミュニケーションもとれない。なにより、怖い。

……閑話休題

「あのさあ、迷子なの？いや、そうだよな？わかった警察行こうか」

「……警察」

こいつともコミュニケーションがとれる気がしないので一方的に話を進めていくと橋を渡り終わった場所にある交番を指差す。その言葉に敏感に反応したのを俺が見逃すわけがない。これはこいつはただの生き物ではないというあらわしだろう。きっと警察に追われて

「……うぐっ、ぐすっ、うわーん！！」

そんなことはなかった。

つーかなんで泣き始めたんだよ！ほら、警察さんが泣き声を聴いたからかこちらに駆け足できてるもの。どうしろと？

「ちょ、なあ、泣きやめって」

「ぐすっ、ひぐっ、着いて行っていい？

「いや、それは話が別だろ？」

危うく誘導尋問のような会話に騙されかけるが冷静な俺。冷たくそいつに笑いながら言うが、それを聞いた瞬間には更に大きな声で泣き始めた。それ見た警官わりとガチでこちらに走ってくる。

「君、どうしたの？」

警官は明らかに作り笑いを浮かべながら俺ではなくそいつに聞いているかと思えばがしりと俺の腕をがしりと掴んできた。もしかして疑われているのだろうか。大丈夫だ俺は悪いことはしていない、っ！かこの生き物何歳だよ、絶対俺と近い年齢だぜ？いい歳して泣いてんじゃねーよ！

「ぐすん……お兄ちゃんが、お家に入れてくれないの」

ぐちゃり

足元で手に大切に持っていたはずの卵が見るも無惨な姿で落ちていた。なにやら幻聴を聴いたせいで動揺して落としてしまったらしい。道路に垂れる黄色くねばついた液体を見ながら冷静に考える。

「お兄ちゃんが、ゆずは嫌いだから……着いてくるなって」

「……君、電話番号教えてくれる？」

警官が明らかにこちらの腕を掴む力を強くしながらまるで尋問みたいに強い口調で質問してくる。なにをしたのか全く心当たりがない、どころか妹などいたかどうかも記憶にない。

「……いや、その……」

やたら気温が暑くなってきた気がする。だらだらと汗を流しながらもごまかす方法を必死に考えている脳。警官に声を掛けられるという初体験に目の前がくらくらという目眩に襲われる、気がした。

すると何故だかはわからないが自分の腕を掴む手が離されていた。顔を上げてそちらを見ると未確認生物が警官の腕を引っ張りながら警官を睨んでいた。

「お兄ちゃん、いじめないでくださいっ」

警官がその生き物の言葉に感動したのか生き物を見ながらうつろうと目を潤ませたのを見た瞬間、何故だかはわからないが俺は、その生き物の手を掴むと走り始めていた。

「こ、こら君っ！！」

不意を突かれたからか警官は目頭を押さえていた手を離すとこちらに駆け寄って来るが、運がよかつたらしく先ほど落としてしまった卵に足を取られてこけている。

それから俺達はなぜか全力で走っていた。

悪いことなどしていないのにただひたすらに逃げていた。

風をきり、肺が酸素を求めてひゅーひゅーと音を立てて呼吸をし

て噎せながらも走り

しばらくすれば自宅についていた。こんなときに限って鍵穴にうまく鍵がはいらない。何度かガチャガチャとしながらようやく鍵を回すと後ろに立っていた未確認生物が鼻歌を歌う余裕があったらしく、ふらふらと歩きながら

「笹倉くん、かあ」

表札を見ながらにこにこしていた。

その顔を見ると涙の筋など無い。

それどころか笑っている。

そして、ここは俺の家。

……嵌められた。

2話 災難は連鎖する

もう既に手遅れだと感じた時には為す術はなかった。ドアの鍵を開けたまま固まってしまったかのように立ちすくんでいたのだが、冷たい風が先ほどの傷口をくすぐった為にふとため息が漏れる。そんな俺を見ながら相変わらずにここにことしながらそいつはいち早くと家の扉を開け放つ。

そんな大きな訳ではないが一軒家の自宅。何故だか住み慣れた家なのではあるが入るのには気が引けていた。玄関では脱ぎ散らかされている俺の通学専用の革靴や、可愛らしい女物の靴を綺麗に並べながら自分のブーツを脱いでいる。つか、ブーツで走ってたのかよ。

「お邪魔しまーす！」

「……ちよつと待て」

そいつの発言とともに廊下を走っていったのを見てから慌てて自分も家に入るが遅かった。何故だかわからないがとたと可愛らしい音を立てながら階段を上がりながら一直線で俺の部屋に向かつてやがる。別に恥ずかしい物などはあるわけではないが、どこなく気恥ずかしいために追いかけてようとして固まる。

この、女物の靴は、誰のだ？

嫌な予感しかない。勘違いかもしれないがくんと鼻をひくつかせてみる。軽く薔薇のような、チューリップのような……とりあえず香水の匂いがする。しかしまだわからない。この匂いはあの未確認生物が放っているという可能性もありうるからだ。とりあえず俺はその場にしゃがみ込むとその靴を摘まむと顔の前に持っていき深呼吸をすると、くんとししながら

「お前は変態か？」

思い切り後頭部にローキックをかまされて下駄箱に勢いよく飛び込んだ。

「……………やあ」

痛いとかそう言う問題ではなく、俺を容赦なく蹴り飛ばした相手を見ると痛みを忘れて自然と冷や汗が頬を伝って自分の危機を悟っているのがわかる。その直後に鼻を刺激する少しきつめの香水が俺の考えが間違っただけだったことを知らせる。玄関で仁王立ちをしなからニーソックスを綺麗に上まで上げている女こそが、俺の最悪の幼なじみ『来栖深雪』^{クルスミユキ}なのだ。

スカートを一瞬ヒラヒラとさせながら俺の手から自分の靴を取り返すとキツとこちらを見ながらあり得ないなどと呟いている。こちらにしてみればこいつが自宅に入っていることのほうが意味がわからないわ。しかしそんなことを言える訳もなく必死に弁論を考える。

「あれ、まだ生きてるの？」

しかしこちらの戸惑いようにもお構い無しに近くにあった俺の親父の趣味で買って買った癖に滅多に使わないゴルフクラブを握りながら振りかぶる。

「いや、待て。誤解だ」

その刹那俺の真横にゴルフクラブがふり下ろされる。ごうつという音を立てながら床に叩きつけられる。耳が無くなったんじゃないかと慌てて耳を触るがまだ無事だったらしくきちんとしている。しかし深雪はお構い無しにゆらりとゴルフクラブをかがけ直す。

「か、母さんお帰りっ」

俺が慌てながら秘技とも呼べる最終奥義を使うと、深雪は何事もなかったかのようにゴルフクラブを後ろに隠すと満面の笑みでこちらに手を差しのばすと

「真琴お、急に転ぶんだからっ、ふふっ」

百八十度変わった別人のような声を出しながら身体を起こすのを手伝ってくれる。しかし奥義の効果も約二秒持てばいいほうだ。俺の母親が帰って来ていないのが分かれば手を放してこちらを睨み付ける。こうなったら仕方ない。死ぬしかないようだ。

「……わくわく」

そんな場所にタイミングよく現れる未確認生物。両手を胸の前で合わせながらなにを期待しているのか、キラキラとした目でやり取りを見てきてやがる。そいつの出現とともに深雪の注意がそちらに

逸れて視線が俺から離れる。

このチャンスを逃すわけにはいかない。俺はその瞬間に握られたゴルフクラブを奪い取ろうとして飛び掛かろうとして立ち上がるとを伸ばした

のだが、そううまく成功することはなく、勢いよく前のめりに倒れると深雪を押し倒すようにしながらその場で倒れた。

「おおーなんとエツチな必殺技なんですかつ！」

ゴルフクラブを奪おうとしたために深雪の手を押さえつけている右手。勢い余ってあらん場所に置いてしまった左手。なんか乗せているのが恥ずかしいからどけようと動かすが

妙に色っぽい声を出しやがるので止まってしまふ。更には深雪の股の間に入り込んだ足。これは大丈夫、危ういことにはなっていない。最後にあり得ないくらい近づいてしまったお互いの顔。ああ、睫毛長いな、つか普通に可愛いなと現実逃避しているとアゴに深雪のアップパーが炸裂。

くらつと目の前の景色が歪んでいき、覆い被さるようにながら
深雪の顔の横に倒れていく。ぎゃーぎゃー騒ぎながら俺の横腹に膝
蹴りをしつこくしているのが分かる。そして未確認生物が楽しそう
に笑っているのも分かる。

ここで意識が飛んだ。

3話 非日常の足音

いつからだろう。人を好きになつたり積極的にコミュニケーションをとらないようになったのは。気づけばいつも決められた三人で遊んでいた。俺は構つてなどと言つた記憶はないのだがやたら絡んでくるそんな幼少期の記憶。深雪と俺とあと一人。いつもいつも泣いているイメージがあるとなにかあるたんに俺の名前を呼んでいた。名前は……確か。

このくらいまで考えていると夢のような、空想のふわふわとした世界から強引に連れ戻そうとしたのか、腹部になにやらずっしりと重いものが乗せられている。

「おはようございますっ」

少し億劫ではあるが目を開くと目の前にこちらの顔をいつから見ているのか、俺の頭を膝に乗せながらにこにことしている未確認生物がいた。だんだん意識がはっきりとしてきて、腹部に掛かる重圧はなにかと目線をずらして正体を確かめる。

深雪が踏みつけていた。

「やっと起きたわね。いつまで待たせる気だったのかしら？」

あまり力が込められていないからその点ちゃんと考えてくれているなと感心するが、そんな発想をかき消すかのようにぐりぐりと足をねじらして力を込める。もうこの際その点には文句を言わずに未確認生物の顔が近いからと押し退ける。冷静になってみると頬がまた濡れた感触がある。舐められたのか、血がでたのかは定かではないが嫌な感触である。

「…帰れよ」

「あら、もう一度ぶん殴りたいのかしら？」

あくまでも自分は悪くないつもりらしく見下して来ながら握りこぶしを作るとにたりと笑って振りかぶる素振りをみせる。俺が呆れて言い返そうとしたのだがそれよりも早く未確認生物が俺の顔の上にお覆い被さるように身体を曲げる。いや、胸が目の前なのですが？

「…えへへ、真琴くんは殴らせません」

いや、胸が目の前なのですが？

「……………うつざいんだけど」

真琴くんと呼ばれる感じがなにかくすぐつたいようは気がする。しかしそれと同時に深雪の足がゆっくりとどかされていくのが分かる。そして俺のベッドに座ったのかぎしぎしと音を立てているのが

わかる。しかし一部始終は胸によって見えない。既に上にあるとか
そう言う話ではなく押し付けられている。

「…てゆーか、あんた真琴のなに？つか、誰？」

なんで笑っているのかは分からないが未確認生物は口でえへへと
笑うと、深雪の質問を聞いて身体をようやく起こしてくれる。そし
てなにやらアイサインなのか俺の目をじっと見つめて答えを求めて
くる。しかたないので俺は口パクで「い」と伝えた、のだが。

「ペットですっ！！」

妙に自信満々にペットといい放つと俺が驚きのあまりに「ごまかす
かのように咳き込むのだが、深雪は明らかに俺たちを見る目を変え
たのか唖然と黙ってしまっている。こうなってしまつとこの場から
逃げだしたくなる。

「……そうなの？」

「はいっ！」

「あんたは黙ってて」

「はうっ！」

なぜかは分からないが先ほどの威勢はどこかに消え失せており、膝の上で相変わらず握りこぶしを握りしめながら真剣な目でこちらを見てきている。そもそも、こいつとの関係を聞かれても特にないもないために口ごもってしまふ。

「…香水の匂いがつく、ベッドからおりろ」

しばらく黙って考えていたのだが餌をあげたらついてきたとは言えないので、とりあえず話を逸らすためにビシッと指を指してそう言っても、深雪は少しだけ悲しそうな表情を浮かべるだけでなにも言い返してこない。それどころか素直に立ち上がると俺の顔を見ながらにやけている生き物に詰め寄り始める。

「…あんた、ここに泊まるの?」

「はい、ペットですからっ」

「いやいや、ちょっと待て。誰もそんなことは認めてないぞ?」

あたかも当たり前のように言うわけなのだがそれは問屋の何かが下ろさない。そもそもお前ら二人とも不法侵入をしているということとを自覚してもらいたい。

「そう、貴女名前は?」

「えと、柚子です。 猫苗柚子ですっ」（ネコナエ ユズ）

俺が話に加わることはせずにたんと自己紹介などをしている。深雪からも名前を言うのにこにことしながら「可愛い名前でっ」などといったのまにかに意気投合をしまっている。この状況だと俺がいるのがおかしいみたいで心地悪い。

「じゃあ、今日から一つ屋根のしたなんだからよろしくね？」

「…は、はいっ。よろしくですっ」

何を考えたのか柚子と名乗る生き物は俺の方をちらりちらりと見てくるのだが、相変わらず元気よく差し出された手を握ると熱い握手をかわしている。いっそのこと引き取ってもらいたいと言っのが本音である。

「よろしく、じゃねーよ」

こんな状況じゃ1人しゃしゃり出ても深雪に引きずり回されるのが落ちなので小さな声でせめてもの反撃を試みる。しかし聞こえていないと分かると少しだけ悔しい気分にもなる。

「……真琴くん、トイレ」

こいつが何故俺の名前を知っていて当たり前のように下の名前を呼んでいるのかは疑問なのはあるが、もじもじとしながらこちらを見ている柚子を見ていると楽しい。俺が黙っていると仕方ないと

言うように深雪が立ち上がり案内をするつもりなのか、おいでと言いながら部屋を出ていく。

あたかも自分の家のように使っているのが微妙に腹立つ。一人になつてみるとなにかほつとしたのかその場で立ち上がると窓を開けて空を見上げる。

しばらくして吹き出してしまった。

深雪の奴、一つ屋根のしたって言ってたよな！？

俺は慌てて部屋を出ると階段をかけ降りると転げるようにしながらトイレの前につく。辺りを見渡しても深雪の姿はない。トイレを教えてふらふらと家の中を歩いているのか？トイレの鍵は外から見ても分かる、空いている。

俺はリビングに二人しているのかと考えてトイレの前から立ち去ろうとするが、尿意を催してトイレの前に戻る。朝起きると小便に行きたくなるのは気絶もおなじだからだろうか？

とりあえずトイレのドアノブを回すと少しあくびをしながら半身突入して身体が固まる。

「……真琴くん、なんですか？」

顔を真っ赤にしながら柚子が便座に座りながら恥ずかしそうに身体を隠すように服を引っ張っている。その直後、俺はトイレから出ると扉をゆっくりと閉める。

そして呟く

「鍵、しめような？」

4話 反抗的×常識なし〃深雪

たった今自分は混乱している。

どこことなくカツコつけて言っただけで見たが結構リアルに混乱していたりする。と言うか恥ずかしいというのが大きかったりする。とりあえず俺はなにもなかったようにリビングに顔を出すと深雪が当たり前のように冷蔵庫をあけている。

「…………お腹減ったんだけど？」

冷蔵庫をしばらく眺めていたのだが、ばたんと乱暴に閉めると何故か反抗的に睨み付けながらこちらに伝えてくる。自分としてもお腹は減っているが、いつからか手に持っていた買い物袋がない。あ、警官から逃げるときに落としたんだ。

「そこに葱あるだろ？」

「ああ、これ？」

「それぞれ」

「食えと？このあたしに？」

二人していがみ合いながら口論をしていると後ろからぱたぱたと

足音をたてて柚子が歩いてくる。それに気づくと俺は内心なかったことにしたさきほどの事件に冷や汗をかいてしまう。

「ご飯ですかっ!？」

「お、おう」

俺の後ろからぴょんと飛び出て来た柚子はなにもなかったようににこにこしながら俺に聴くが、気が気ではない。深雪にばれたらヤバいとかではなく、人間としての立場がなくなる気がする。そんな俺の様子のおかしさに気づいたのか柚子は背伸びをすると俺の耳元で

「大丈夫ですっ。男の人ですもんねっ!」

囁いたわけだが。

とてつもなく勘違いをしている気がする。と言っかなんか深雪が睨んできてるのが怖い。

「あの、だな?あれは事故なんだ。決してお前の……」

俺が誤解を解こうと必死になにか言おうとするが、聞く耳はもたずにとてととと深雪の近くに走り寄って行けば冷蔵庫や棚をばたばたと開いている。そんな様子を見ると本当にこの家に住み着きそうとても怖い。

深雪は柚子がうろちよろと動くので邪魔にならないようにとこちらに歩いて来て、軽く手招きをして部屋を出て行く。柚子はありったけの食材を出してにこにこしながらフライパンを出している。

「真琴くんっ、これ使いますっ」

「ん、ああ」

出ている材料を見るとチャーハンでも作る気なのか言いながらもコンロの火をつけている。多少心配なのだがあんなにはしゃいでいるのたがそれくらいはいいだろう。俺は悪くない。いざ親に怒られてもこいつのせいにする。

とりあえず俺は手招きをして廊下に出た深雪についていくようにして廊下に出て、先ほどの深雪の恐ろしい発言を思い出す。

その真意を確かめようと口火をきろうとしたのだが、それよりも早く深雪が悲しそうに声を発する。

「……真琴、あの娘のこと好きなの？」

いや、本当に意味がわからない。

「…は？」

なにを言うのかと思えばとてつもない発言をし始めて一人でイラ

ついているのか、貧乏揺すりのように指をばたばたと動かしている。それどころか近づいて来た。

「なに？答えられないんだ？」

顔を近寄せながら下から見上げながら噛みつく様にそう言うのだ。が本当に意味がわからない。つか、ヤンキーかよ。

「いや、嫌いとかそういうのではなくてですね？今日初めて会ってですね？あと、足踏まないでくれます？」

どう勘違いしたらこいつの目には俺があいつを好きと映ったのだろう。一方的に押し掛けられて料理を作り始めただけなのだ。なにを怒っているのだろうか、足をぐりぐりと踏みながら睨み付けてくる。

「ふーん。なのに泊めるんだ？あたしは泊まるから」

「いや、泊める訳ないだろ？親が許すわけないだろ」

いつの間にかこいつも頭の中で泊まるのが決定となっているらしいが、そんな話はしていない。つか、この家の許可はなくて泊まれる感じなの？

「あたしは泊まるわよ？」

「いや、だから親が許すわけないだろ」

「無理。泊まる」

「……………」

こいつは馬鹿なのだろうか。なんでも願ひ通りにいくと思ってるのだろうか。どうしたらこんな自信満々に食って掛かれるのか不思議でしようがない。

「あのさ、ふざけんなよ？」

「ふざけてんのはどっちかしら？」

もう、埒があかない。もうどうしたのこの女？なんでこっちが悪いことしたみたいにキレてんの？どう考えても俺が勝てる気がする、つか勝てる。

この女半端ない。人になめたこと言いながら携帯いじり始めた。ぐれてんの？

「あのな」

「あ、もしもしい？真琴のお母さんですかあ？」

こつちの話を聞かないと思えばなにとんでもないとこに電話してるの？

「今日泊まってもいいですかあ？」

そして単刀直入すぎる。理由を飛び越えてダイレクトに願ひを伝える。どこのお嬢様なの？

「いいってよ？」

あのばあはなにやってんの？なんで二言目には許可してんの？あれか、あれなのか？馬鹿なんだろう？そして勝ち誇った様に俺の頬を撫でる深雪が男だったらぶん殴ってる。

「勝手にしろ」

「は？」

いや、なんでこんなに反抗的なのか？俺がなにしたよ。階段に座って見下すように膝を組むのを見るのがなとも言えなく、うざい。

「……なんで泊まんだよ」

「……関係なくない？」

いやいやいや、なに言ってるのこいつ。俺の家である以前に明らかに俺は悪いことはしてないのに、この態度。

こいつと話してもキリがないというか、話にならない。

俺はその場に背中を向けるとすたすたと歩いてリビングに戻ろうとドアに手を掛ける。

「……あたし以外の……とふたり……りとか考……れない」

なにか深雪が呟いたように聞こえたがなにを言っていたのかはよ

くわからない。一応後ろに振り返ってみるが何故か顔を赤くしながら中指を立てているので無視をした。

5話 チャーハンは飲み物

目の前に並ぶ質素ではあるがとても良い匂いを出しているチャーハン。俺が部屋に入ると盛り付けを丁度終えたらしく柚子が駆け寄って来た。

「頑張りましたっ」

「ああ、うまそうだな」

正直なところ自分で作る料理に比べると格段にレベルが高く、とても食欲をそそるものがある。なので素直に褒めたつもりなのだが目の前に立っている柚子は動こうとはせずににこにこことこちらを見上げている。

「頑張りましたっ!」

なにを期待しているのかもう一度言い直すと目をキラキラと輝かせながら見上げる目を逸らしてこない。まるでご褒美を求めるペットの様でなんか可笑しくなる。

「真琴くん。ゆず、頑張りましたっ!」

なにをしてやれば良いのか分からずとりあえず苦笑いを浮かべていると、柚子はぷくーっと頬を膨らましながらこちらの服をくいきい引っ張ってくる。

「……頑張ったな」

なにを求めているのかは分からないのだが、じつと見られると不思議と手が柚子の頭を撫でていた。途中で恥ずかしくなり手を離すのだが、柚子はそれが満足だったのにんまりと笑うとえへなどと緩く笑うと離れて行く。

「……邪魔よ」

自分のしたことに自嘲気味に笑っていると後ろからわざとらしく肩をぶつけて深雪が通り過ぎて行く。そんな深雪にもにこにこしながら席をすすめて自分も椅子に座ると俺を手招きしてくる。

「…わかってるよ」

手招きされるがままに深雪の隣の席に座ると深雪に差し出される箸を受けとる。

「チャーハンを箸で食べと？」

「道具があるだけいいじゃない」

ちゃっかり自分はスプーンを用意しており、チャーハンを口に運んでいやがる。俺は悔しいのでとりあえず箸でチャーハンを食べようと頑張るが、ぼろぼろと溢れてしまい食べれない。

柚子はそんな俺達を見てにこにこしながら控えめにチャーハンを食べている。

「…なんだよ」

「……………みんなと一緒にの食事っていいなって」

視線を感じては箸も進まないわけなので箸で柚子を指差しながら聞くのだが、柚子は妙に悲しそうに笑うとそう言う。その言葉に深雪も手を止めるとなにも言わないがちらりと柚子を見る。俺はその言葉が妙に重く感じられてしまい、無言のまま次の言葉を自然と待ってしまう。

「…ところで、チャーハン美味しいですか？」

そんな状況を察してなのか柚子はいつもの様ににこにこと笑い始めると身を乗り出して話題を変えてくる。深雪はその質問に少しなにか聞いたそうにするのだが、頷いて美味しいと呟く。俺もそれに合わせて頷く。

それを見て柚子は更に笑みを浮かべるのだが、雰囲気が重くなってしまったのがわかるのかまだ食べ終わっていないのだが、立ち上がるとお腹をさすって「お腹一杯になっちゃいました」と言っけてキッチンに皿を置きに行く。

「……………」

今日あったばかりなのだが少し心配にもなり、気がそちらに向いてしまい深雪を肘でつつくとアイサインのようなもので深雪に指令を送った…つもり。

伝わったのかは正直不安でしょうがないのだが、深雪は立ち上がるとチャーハンを食べ終えた皿を持って柚子に近寄っていく。

「今日は泊まっていきなさい」

あの馬鹿、なにを言っただ？どこをどう考えてこのタイミングなんだ？つか、俺の許可がないのだが？そしてなぜ柚子はえ？今さら？と言う様に首を傾げながら頷く？そして、スプーンが欲しい。

とりあえず頭の中で一生懸命ツツコめばため息わついてスプーンを取りに立ち上がると柚子がぱたと近寄ってくる。正直、なんか嫌な予感がする。

「スプーン、あります」

「ありがとう」

今回はまっとうな理由でスプーンを差し出してきた。俺は素直に礼を言っただけでスプーンを引っ張るのだが、何故か柚子はそのスプーンを手放さない。反抗期なのかな？

「……………」

深雪は深雪でなんでか分からないけど怖い表情してこちらを見ている。こいつは反抗期どころか猛獣期とかそんなだと思っ

「柚子ちゃん？離してくれるかな？」

「座ってくださいっ」

「ん？なんで？」

「座ってくださいっ」

「…わかりました」

こちらが意味も分からず質問をしても何故か聞いてはくれず、ここにことしながら椅子を指差している。とりあえず手を離して椅子に座る訳だが、なにをされるのか怖い。

すると隣の椅子に座った柚子はスプーンで俺のチャーハンを掬うとあーんと言いながら口元に近寄ってきた。それと同時に深雪がキッチンのだんごを手にしたのは気のせいだと信じたい。

「……んと？」

「あーんしてくださいっ」

苦笑いしかできない俺をあまり気にせずにくりぐりと唇にスプーンを押し付けてきやがる。強引ではあるがしぶしぶと口を開くとスプーンが口内に侵入してくる。

「えへへ、カップルみたいですねっ」

侵入したのはいいのだがこの発言に危うく吹き出しそうになる。拳げ句の果てにはこちらからもあーんとしなければならぬのではないかい？

そんなことを考えていると深雪が近寄って来てあたしもやりたー

いなどとぬかしながら柚子からスプーンを受けとる。

「はい、あーーん」

妙に笑顔を浮かべながらスプーンを差し出してくるのだが、そこは口ではないです。鼻です。開いたら怖いと思いますわ。

「……………嘘よ。ほら開いて」

なんの反応もしないと、というか鼻が開かないと深雪は口元にスプーンを近寄せるとそう言う。いつものような意地悪い笑みはなく、整った顔が俺の顔を見ている。こう見ていると可愛いななどと感じて口を開くとスプーンがあり得ない速度で喉にぶつかってきた。

「っ！？げほっ、ぐはっ！？」

「……………ごめん、ミスった」

そんな訳ないだろ。喉にダイレクトでチャーハンinですか？どこのヤンキーがその食いかたするの？チャーハンは飲み物なの？

「えへへ、痛そうですね……」

「罰よ」

いや、なんの 罰なのだろうか？

6話 ラブコメは突然に

結局は俺の家に女の子が二人して泊まるらしい。よく考えると別に部屋は余っているから構わないのだが、女の子だと言うと少しだけ気まずい気分になってしまう。

いや、一人は女の子としてすら見ていないのだが。

ところでその二人はなにをしているのかと言えば二階に上がって部屋を見るなどと言って消えて言った。俺はやることもないのでソファーに寝転がるようにしながらテレビを見ている。

「ただいまー」

しばらくすれば玄関の扉を開ける音と共に母親の声が聞こえてくる。ちらりとそちらの方を見るのだが上の階から慌ただしく階段を降りてくる足音に嫌な予感がする。

「お母さんっ」

やはり柚子がでしゃばって俺の母親に会いに行っている。俺の母親も何故かテンションがあがっているのかきやーきやーと盛り上がっている。リビングには買い物袋を受け取ったのかぶら下げる柚子と母親が入って来た。

母親の名前。笹倉 希美（ササクラ ノゾミ）。年齢を言うことはできないがとて若く見える顔つき。肩まで伸びたパーマのかった茶色い髪の毛友達からしてみれば俺は美しい母親を持っていた羨ましいらしい。

賑やかに二人して話しているので一応おかえりとは言うものの、ほとんど無関心というような態度を取りながらテレビを消すと部屋を出て行く。

「真琴！。これっ」

すると母親に呼び止められて振り返ると何かを投げつけられる。それは避妊具だった。

俺はとりあえずそれを近くのゴミ箱に投げ捨てると後ろでなにかを言っているのだが、無視をして自室に向かおうと階段を上がる。どこが美しい母親なのだろうか？

とりあえず母親のような大人にはなりたくないとは思っているのだが、あの母親なかなかの凄腕で弁護士をやっている。母親事態が法に触れそうなのだが。

そんなことを考えながら自室の扉を開けると、何故か俺のベッドに寝転がりながら深雪がマンガを読んでいる。俺の存在に気づくとちらりとこちらを見るが再びマンガに目を戻す。

「なにやってんの？」

「読書」

「ここで読むなよ」

「は？」

俺は何一つ間違ったことを言った気がしないのだが、なぜこんなに反抗的なのだろう。しかも読んでいるマンガが格闘技系のマンガだからさらに怖い。

「それ、女が読むマンガじゃねーよ」

「……………うるさいわね」

別に深くは考えずに椅子に座りながらそう言つと深雪は直ぐ様マンガ閉じて小さな声で文句を言ってくる。しかしその口調は少し覇気がない。

それどころかもじもじとしながら本棚を漁るといろんかマンガに目移りしているが、なにもとらずにベッドにまた座る。

「別に読むなとは言つてねーよ」

俺はそんな気ではなかったので雑誌を読みながらそう言つが、深雪は首を軽く振るだけでマンガには手を伸ばさない。

「お前、どうしたの？」

なにやら突然態度が変わったのが違和感でしようがなく、立ち上がって近寄って顔を覗き込んで見る。しかし深雪は黙ったままでこちらを睨んでくる。

「……………すいませんでした」

ぶつちやけ何故俺が謝らなければならないのか分からない。しかしこの威圧感の前では謝らなければならない気がしたのだ。

「女の子らしくなくてごめんなさいね」

しばらく無言でいると深雪が小さな声でそう呟いてくる。そして顔を赤くしながら舌を出すと枕でこちらの顔に押し当ててくる。

「お、おいつ、深雪!？」

「あーあー聞こえない!!つか死ね!!」

少しの間呆然としていたがだんだんと押してくる力が強くなるので、なにも言えなくなってしまういそのまま椅子にもたれ掛かる。するとその枕を俺に一度投げつけると深雪は部屋を出て行ってしまう。

それと入れ違いに柚子がひょこりと現れる。こいつはこいつで妙に元気がよく俺の膝の上に座ると枕を背もたれのようにしながら寄りかかってくる。なぜこいつはこんなに慣れなれしく接してくれるのだろうか。

「……なあ」

だらりと下げた手を上に上げながら後ろから小さな声で呟く。それに柚子は敏感に反応して上がる手を掴んできたのだがパツと離しておどおどとしている。

「…起きてたんですかつ」

なにを弁解してるのか膝の上でぐらりぐらりと揺れながら言うが、俺は怒ることはなく離された手を再び柚子が握られても抵抗せずに少し笑ってしまう。柚子は掴んだその手をシートベルトのように自分の腰に回している。

「なあ」

「はいっ」

「…深雪って繊細なんだよ」

「…みたいです」

「……あいつ昔は男の子みたいな格好しててさ」

柚子は俺の愚痴のような発言におとなしく相づちをうつてくれる。そんな柚子がどこか懐かしいような、不思議な感情になる。

「…そのことを指摘したらさ、それ以来スカートしか履かなくなっただよな、あいつ」

そう思うと先ほどの発言が失礼だったなと改めて感じる。深いため息がこぼれてしまいそれがくすぐったかったのか柚子がくすりと笑う。

「…深雪さん、気になってるんですよ」

柚子の発言にこの時は別になんとも思わなかった。自分の容姿や他人からの目を気にしているのだろっな、くらいに軽く考えていた。

「えと…ゆずも気になりますよ？」

俺が微妙に笑っているのを見れば柚子はえへと一緒に笑いながらそう言う。それなら俺だって気にしてる。好きな人がいるわけではないが、ダサい格好はしたくはないのだ。

「………わかってないですねー」

俺の反応が薄かったからか柚子は顔をこちらに軽く向けながら呟く。しかしその言葉の意味はよくわからず、苦笑いが生まれ首を傾

げてしまう。

「……こーゆーことです」

そんな俺を嘲笑うかのように柚子はふにやりと微笑み、からだごとこちらに向けると俺のデコに軽く唇を押し付けた。

ああ、そういう意味か

は？

7話 雨降って地固まる

俺がきよとんとしたまま茫然としていれば上に乗る柚子がよじよじと降り、自分の頬を搔きながら少し照れているらしく咳払いをする。

「…真琴くんは、ゆずの中で大きな存在ですからっ」

今日会ったくせしてずっと気になっていたような言い方をしてくる。俺の中では柚子はそのような存在でなく、深雪ですらそのような感情を抱いたことはない。そもそも自分が恋愛に疎いということでは自分でも気づいている。

「…な、なに言ってるの？」

「好きなんです。深雪さんもあたしも真琴くんを」

冗談で間際らしいことを言っているのだと頭の片隅で考えるが、そんな考えを一瞬で否定してにこりと笑う柚子。それどころか顔を少し赤くしているからリアリティーが湧く。

「お前なあ、深雪はともかく。お前は今日会ったばかりなんだぞ？」

「…………えへへ、フラれちゃいました」

今日会ったばかりと言うとどこか表情を揺らす、また笑うと身

体をしゅんとするように見せるつもりなのか肩を落とし、俺のベッドに腰を下ろす。しかもそのままそこに寝転がると毛布にくるまり始めた。

「お前、変な奴だな」

「わー、ひーどーいー」

その様子を見ながら少し吹き出しながらそう言つと柚子はあまり気にはせずにぐるぐる回りながら言い、突然むくりと起き上がると毛布に顔を埋めるとくんくんと匂いを嗅ぎ始めた。

「ばかつ、やめろよっ」

「むふふ、病みつきになりますなあ」

「うわっ、変態だよ」

「にやつー!!」

先ほどのやりとりを忘れさせるつもりなのかやたら可愛らしく、しかしどこか変態的にこちらにじゃれてくる。そして変な掛け声と共に飛び付いて来やがる。まだ椅子に座っていたからダメージは少ないがそのまま椅子が後ろに下がる。

それにしてもこいつは妙に軽いと言うか、痩せているというか、乗られても苦痛になることがない。まるで子供のように笑いながら俺の胸板に顔を押し付けてくる。

こうしていると自分より年下に見える柚子が可愛らしく映る。そ

れと同時にキスを思い出して一人赤面してしまう。それが相手にばれたくないので、話題を探すためにたった今思った年齢を聞いてみる。

「ゆずの年齢ですかあ？18ですよ？」

ぶっちゃけびびった。俺の同年だから。え？それでこんな精神年齢も含みガキ過ぎやしないか？その、胸は立派ですが。こちらの慌て方を見て柚子はつんつんと俺の頬をつつく。

「あの、柚子さん。やめてください」

同年と分かるとなんだか先ほどのような態度がとりづらく、何故か敬語で柚子に話しかけてしまう。しかしその発言も変だったのかけたけた笑いながら俺の上で身体を擦らせる。しかもこの態度でこちらが驚いているとわかったのか、笑いをやめると

「真琴くん、キスしてくださいっ」

ふざけたことを抜かしやがった。

一応全力でお断りさせて頂き上に乗っかる柚子をそのまま持ち上げるとベットに投げ捨てる。どこの痴女なんだよ。

「わわっ、真琴くんが怒ったっ」

流石に投げ捨てられるとは思っていなかったらしく、少しおどけながらこちらを見上げながらしゅんとしている。それを見るとやは

り同い年には見えない。それどころか中学生に見える。その、胸は立派ですが。

一応説教と言つか忠告と言つか、とりあえずこんなことすると言おうとするが、なんて呼べば良いのか分からず黙ってしまふ。なんだろ。猫苗さん？猫苗？

「あの……なんて呼べばいいでしょうか」

「んー、ゆずゆずっ」

「柚子にさせていただきます」

選択肢なんてなかった。すこし失礼な気もするがこの人に丁寧に名前を呼べる気がしない。なのでとりあえず頭の中で呼んでいた呼び方を一応提案……せずに柚子に決定した。

「やー、ゆずゆずがいいっ」

「……猫苗さんでもいいんですが？」

「柚子でいいですっ」

なにが不満なのかぷくーと頬を膨らませながらそう言う。別に呼び方なんて何でも良い気がするが、なにかロマン的なものがあるのだろうか？

「深雪さんはなんて呼んでるんですか？」

「へ……、ああ、深雪って」

突然深雪の話題を出されるとやはり先ほどの好きだと言う話が頭に浮かんできてしまう。煩惱退散。俺に好きになってもらうのを諦めたのだろうか？いや、別に気になっっているわけじゃないぞ？ただ思い出したからさ。

閑話休題……

とりあえず俺が返事をするとうちはうんうんと頷きながなにかに納得している。

しばらく俺の上に乗ってのほほんとしていた柚子だが突然ひよいと降りるとぺたぺたと部屋を出ようと歩いて行く。そして扉を開けようとするタイミング良く深雪が扉を開ける。

「あれ、ゆずゆず。なにやってんの？」

いつの間にか仲良くなったらしく当たり前前の様にあだ名で呼んでいる。

「ゆずがちよつと聞きたいことあっただけですっ」

別にやましいことがあった訳ではないが先ほどの深雪とのやり取

りを思い出すとなにか気まずい。そして柚子はそのまま立ち去って行く。しかし何故かもう一度帰ってくる。

「おトイレ借りますね？」

わざわざ帰って来て言うことではないが俺にしてみれば、この言葉に意味があるので冷や汗をかいてしまう。別にわざと覗いた訳じゃないのにさ…。

それだけ言い残すと柚子はまたぺたと立ち去って行く。残された深雪と俺。先に口火をきったのは深雪。

「さつき、ごめん」

ただ一言であるがあゝの深雪が謝った。それが驚きなのでもあるが、問題なのは俺が悪いのに謝られたという罪悪感である。深雪はそれを言い残すと、じゃっ、と言って背中を向ける。

その背中に手を伸ばして俺は深雪の足を止めてしまった。どんな顔して謝ればいいのかもわからない。けど謝らなければと思っている。深雪は足を止めるがこちらには振り返らずに黙っている。

「……………ごめん」

ただ一言、言うために手のひらにじわりと汗が滲む。いつもなら

絶対に謝るような仲ではない。しかし柚子の言うことが本当ならどうも変に意識してしまう。

「……………いいよ、別に。気にしてない」

俺が謝ると手を振り払っていつもの意地悪い笑みを浮かべながらそう言う。しかしどこことなく言葉に覇気はなく、目を合わそうとはしてくれない。

「……………あたしが、女の子っぽくすればよかったんだしさ」

「……………」

「…なに？あんまり見ないですよ。恥ずか、っえ!？」

俺は、不意をつくようにしながら深雪をそつと抱き締めた。

急に抱きつかれたからか動揺しているが離れようとはしていない。ただあたふたとしながら顔を赤くしてこちらを見上げてくる。

「……………勘違いすんなよ。あれだ、可愛かったから、つい」

俺はそんな深雪をすぐ解放してやるが、未だにあたふたとしているのを見るとにたあと笑いながらそう言う。深雪もその言葉を聞くと少しの間ぽーっとしているが、くすりと笑って俺の頬を急につまむ。

「……知ってるっつーの！」

「アホか」

つまんだ手はいつもより優しく直ぐに離してくれた。お互いに悪者っぽい笑みを浮かべながら許し合えたんだと思う。

そんな些細なことが嬉しかった。

7話 雨降って地固まる（後書き）

絶賛スランプ中、なり

8話 ギャップと天然と母親と

どういつことなのだろうか？

本当に意味がわからない。

今の状況。

俺の部屋に布団が二人ぶん重ねられている。俺がベツトに寝る訳だから、誰か二人がここで寝るのだろうか？

あ、柚子と深雪か。

「いやいや、なんで？」

「あたしがこの部屋しか空いてないって言ったからじゃないかしら」

「おいばばあ」

気のせいだろうか、母親が俺の部屋のカッターを取りに行ったのが怖いのだが？

「お母様。美しいです」

「あら、そうかしら？」

あり得ないくらい勢いよく振り返るとカッターを投げ捨てにことし始める母親。そして何故なのかはわからないが、俺の胸板にの字を書いてくる。挙げ句の果てには一人で照れながらこちらの顔を叩いてくる。

「あの、母さん？痛い」

「真琴お、知ってる？母さんの魅力のこの肌のきめ細かさを保っている努力を」

しらねーよ。

「……さあ、飯だ」

この際部屋にある布団は女子二人に言って移動してもらうので無視し、とりあえずこの母親から離れることにした。もう、なんだか自分の親だと思つと恥ずかしい。

とりあえず俺は晩飯を作っているはずの柚子と深雪がいるリビングに向かった。なにやらお世話になるのでこはんくらい作る、とのことだ。

正直、そんなことさずに後ろでまだぶつぶつと言っている母親を働かせれば良いのに。暇だから、と俺に絡まれるのは勘弁して欲しい。

「にゃー！」

リビングに入るなり聞こえる声。間違いなく柚子だ。

「あらモナカじゃない」

柚子の奇声にひょこひょこ歩きながら深雪の足下でくるまる猫。こいつは俺の家のペットである、モナカ、である。いまいち俺にはなついてはいないが、母親にべつたりの子猫である。

「モナカー、おいでー」

母親がモナカの名前を呼ぶと駆け足でこちらに向かって走ってくる。しっかりと俺を避けながら母親の足に身体を擦り付けている。

なんか、ペットにも嫌われるって悲しいな。いつも顔を合わせているのに、俺の出す飯も食べてくれない。

「ゆずー、おいでー」

とりあえず悔しいのでふざけ半分で猫をジーっと見ている柚子に

声を掛けてみる。するとさぞかし当たり前のようにこちらに駆け寄ってくる。いや、人間なのだから名前を呼んだら来るか。

「モナカ、欲しいですっ」

俺の元に来るなりモナカを指差しながらそう言うのだが、どうしろと？と言うかお前もモナカにぞっこんなのな。

「みゆきー、おいでー」

「死ね」

さすがに深雪は来てくれなかった。

猫にべたべたと柚子がじゃれているので、俺と深雪が出来上がった料理をよそり、テーブルへと運んでいく。なにが楽しいのか柚子はお尻をふりふりとしながら四つん這いで猫と会話している。…ように見える。

「ゆず、飯だ」

「にゃっ」

「真琴のおかあさん、ごはんですよー」

「はいはいっ」

御飯と聞くと柚子は振り返りながら猫語を駆使して返事をする。母さんは待ってましたというように駆け寄ってくる。

父親は毎度夜遅くに帰ってくるので晩飯は基本的に母親と二人だった。しかし今回はなぜかにぎやかで少し嬉しい。料理の品もなかなか豪華で、オムライスである。

余談ではあるが、俺はオムライスが大好きだ。本当に余談だ。

「いただきますっ」と

女三人は何処に座るなどと話し合っているのだが、俺は何時もの定位置の場所に座ると早速オムライスをスプーンで口に運ぶ。

因みに余談ではあるが、オムライスにはケチャップは掛けない派である。中に入っているチキンライスにケチャップが入っているのに綴じている玉子焼きにまでケチャップをかけると、味がしつこくなってしまうからだ。本当に余談である。

結局女子達は深雪が俺の隣、柚子が俺の向かい、母親は柚子の隣と決まったようだ。各自各々とオムライスを食べにかかっている。

俺がモグモグとオムライスを食べながらテレビのリモコンを探す。と深雪の目線がこちらにきていると気づく。俺がなんだという風に首を傾げると深雪は軽く咳払いをし

「……お、オムライス……美味しい？」

こんなことを聞いてくる。

わりと可愛かった。

こいつが照れながら聞いてくる姿はいつものキャラクターとは違く、ギャップというのか少しどきりとさせられる。

「う、美味しいよ」

「だよね。ま、まあ、当たり前よっ」

当人はとても緊張していたらしく、俺の答えを聞くと嬉そうに一瞬笑うが、直ぐ様つんとそっぽを向いてしまう。そんな様子を見ながら柚子がスプーンをくわえながらこちらを見ている。あと、母さんもスプーンをくわえながらこちらを見ている。母さんはやめて欲しい。

「……んだよ」

「…真琴くん、頬つぺたにごはん付いてますっ」

恥ずかしいことにこちらを見ていた柚子が俺の口元についたごはんつぶを取ってくれる。しかもそれをなんの躊躇いもなくパクリと

食べてしまっ。恥ずかしくないのだろうか？

こっちが妙に恥ずかしがって俯くと隣の深雪がグリグリと足を踏んでくる。とても容赦がないので、痛い。

痛みに我慢しながらスプーンを進めると母さんがにたにたと気持ち悪い笑顔を浮かべながら、柚子と深雪を交互に見ている。

「今夜はどっちとやるの？」

「ごちそうさまっ！！！」

このばああり得ないわ。

とりあえず柚子は意味が解らずにににことしているが、深雪はこちらを軽蔑しているかのように見ながらスプーンを進める。非常にいづらくなつた俺は食べ終わるなり立ち上がる。

「あつ、真琴。お風呂沸かしておいて」

立ち上がったのを見ると膝に座るモナカを撫でながらそう言うてくる。

柚子はそのモナカを見すぎてスプーンがきちんと口に入っていない。どれだけ気に入つたのだろうか。

「あ、風呂俺が一番に入るわ」

キッチンにある遠隔操作でお湯を張れるボタンを押しながら何の気なしにいうのだが、それを聞いた深雪と柚子はいきなり手を合わせると食事を終え、二人してリビングを出て行く。

え？嫌な予感しかない。

「ああ、濡れ場だよ。濡れ場」

母さんはけたけたと笑いながらそう言うが、あり得ない話ではないので怖い。

つか、母親が言うなし。

まあ、さすがに風呂場まで来ないだろ。

そう考えた俺がバカでした。

9話 理不尽も恋心

ふふふ、俺は天才なのかもしれない。

風呂に柚子と深雪が来るかもしれないなら、鍵を閉めて仕舞えばよいのだ。

我ながら素晴らしい作戦だと思い、つい微笑んでしまう。

とりあえず脱衣場につけば鍵を閉める。しかしこれではなんとなく安心できない。

なぜなら家の風呂場の鍵は硬貨などがあれば開けられる飾りのような鍵だからだ。あいつらならばさぞかし当たり前のように蹴破るだろう。

なので、近くにあった小さな小棚を置いてみる。しかしまだ軽い筈だ。もう一度言おう。あいつらならばさぞかし当たり前のように蹴破るだろう。

こうなったら小棚なんてある意味はないに等しい。ならどうするか？

なーに、簡単なことだ。

俺は小棚を元の場所に戻し、一度表に出る。なんのために置いたのか聞かれても無視だ。

表に出れば俺の独壇場。

ポケットからドライバーを取り出すと、

ドアノブを取りにかかった。

こうすれば入るところか扉を開けることすらできない。出るときは、内側から扉を開けるのであまり関係ないのだ。そして事がすんだら再びつけねばよいのだ。完璧すぎる。

がちやがちやとなにやら訳のわからん金具やネジが落ちるが気にはしない。とりあえずドアノブを取り終えると大きな達成感にしばし浸される。

よし、風呂に入ろう。

脱衣場に入り扉を閉めれば完全な密室が出来上がり、服も脱ぎ捨てるとくくくと不適な笑みを抑えることせずに風呂場にはいる。

「あつ、真琴くんっ！」

何故風呂場にすでにいるのだろうか？

しかも柚子だけではなく深雪も柚子と苦しそくに湯船に浸かっている。とりあえず、整理しよう。

俺はそそくさとタオルを自分の腰に回して大事な部分は隠すと、浴槽に柚子たちに背中を向けて座ると考える。

えーっと、俺が風呂に、はいる

中には既に女二人。

裸。

ああ、あれだ。

捕まる気がしてきた。

「すみませんでした。今出ていきます」

「待ちなさい」

冷静かつ迅速に判断をして風呂場から出ようと腰を浮かすが直ぐ様深雪に肩を掴まれてしまった。俺がなにかしましたか？

「真琴くんっ、お背中お流しますっ」

「む……あたしは頭洗ってあげる」

「いえ、結構です」

こいつらは馬鹿なのだろうか？

背中を向けているからその姿は見えないのだが、絶対に見たら終わる。理性やいろんなものが。

しかも俺が丁寧に断ると不意にどちらかが抱きついてきた。あ、

柔らかい感触あるから柚子だ。深雪はまな板だもんな、うん。

いやいやいや、タオルは？やけに肌と肌が触れあっている気がするのですが？俺がかなり危ういことになりかねないので、その場で柚子を振りきると風呂場を飛び出す。

さすがに深雪も不意を突かれたらしくあつと呟きながら浴槽から出てくる。

しかし、甘いつ。俺はタオル巻いてるからこのまま部屋にこもってやる。

「じゃあなあああ！！！！」

かなりテンパリ気味だが俺はドアに手を掛けて押す。

開かない。

明らかに外からなんかしらの体重がかけられている。なんだ？

「……あら、モナカおいでー」

「くそばばあああ！！！！」

俺のむなしい叫びに表から楽しそうに笑う声が聞こえるのと同時に、ガシツと掴まれる肩。

「真琴くん、逃げちゃ嫌です」

いや、可愛いよ？けどさ？

「真琴、あたしの言うことが聞けないの？」

どこのガキ大将？

「いい湯だったねー」

「ですすっ！」

「…うぐすっ」

結局風呂場ではおもちゃの様に身体を洗われ、大事な部分は一生懸命に隠したのだが、もう婿にいけない気がする。しかもやたら嬉しそうに二人がしているのが腹立つ。

もう、悔し涙もいうか、母親に対する裏切られた感がすごい。

俺はあくまで目を閉じていたから大丈夫。見てないから。感触は楽しみましたかな？

「うひゃひゃひゃ！」

おい、ばばあ笑うな。お前の人れ知恵だと言うことは分かっている。じゃなきゃ柚子はともかく深雪はこんなことはしない。

「…真琴くん、ゆずのこと見てくれませんでした」

「……真琴、あたし達に謝って」

今の状況。

風呂から出るとぶんすか怒っている二人。

二人の前に正座させながらぐずぐず泣いている俺。

爆笑する母親。

謝れと強制してくる深雪。

ごめん、なにが悪いのかわからない。

「いや、だって、俺は」

「謝って」

「え？あの、え？」

「謝れ」

「すみません」

どうも深雪には勝てない。どことなく人を見下した目をしているし、拒否はできない威圧感がある。

「真琴さんに聞けませんでした」

「もういいわよ、真琴なんだし」

柚子の発言にどこか慌てた様子を見せ始めた深雪は俺を侮辱してから立ち去ってしまう。

「あ…えと？」

「ゆずもぶんぶんっですっ」

しかも柚子すらも怒ったたいうことを口で表現しながら立ち去っていく。

あれ？

俺悪くなくね？

「謝りに行かないの？」

「……なんでだよ？」

急に母親がけたけたと笑いながらあたかも俺が悪いみたいに口を挟む。

しかし俺が悪いとは思わないし、怒っている理由がわからない。

「あの二人、あんたに振り向いてもらうつて張り切ってたよ」

うん

知らねーよ。俺が何故悪くなるんだよ。あいつらは勝手に侵入し

てきた訳だし、謝る理由が見当たらない。

しかしふと柚子の台詞が蘇る。

「深雪さんも、ゆずも、真琴くんが気になってます」

……いや、俺は悪くない。

しかしよいしょと立ち上がる。

「少年、あれか？夜這いか？」

「死ね」

母親の親とは思えないギャグを無視してリビングを出ようと扉に手を掛けて止まる。

「……あいつらに、説教だよ」

ちよつと恥ずかしいから嘘をついてリビングを出た

9 話 理不尽も恋心（後書き）

あれだ、風呂場のやり取りは割愛しました
↑

R18はさすがにまずい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8842y/>

捨てね娘

2011年12月21日21時45分発行